

審査の結果の要旨

氏名 禹成勲

本論は、高麗の都城開京（現在の北朝鮮開城）に関する都市史的研究であって、とくにその空間構造の特徴と都城としての特性を明らかにしようとするものである。

従来高麗時代の朝鮮半島の都市については資料的制約によりその実態解明が著しく遅れており、そのなかでも平壤については一定の研究蓄積がみられるものの、都城開京の都市史はほとんど先行研究がみられない。そうした状況のなかで、本研究は建築史の方法を駆使して当該期の資料を徹底的に読み解くことによって、はじめて開京の実態に迫ったものとして高く評価できる。

当該期の資料としては、『高麗史』、『高麗史節要』、『宣和奉使高麗図経』などが知られていたが、本研究では高麗時代文人の文集、地方誌類、絵画資料、古地図などを利用して、可能なかぎり都市空間の物的構成を復元しつつ、その背景となる政治的・経済的・文化的状況を明らかにしている。

論文は全体として3部からなり、それに序と結論が付く。

序ではこれまでの韓国における都市史の研究史が跡づけられ、本研究の立脚点が述べられる。すなわち韓国の都市史はその資料的制約と方法論的問題から、従来、日本の歴史学の影響を受けた政治史、社会経済史的研究は一定程度進展してきたが、空間的立場からの研究はほとんどみるべきものがなく、その分析視角も未熟な段階にとどまっていると指摘する。

第1部「開京の都城的・都市的展開とその理念の変化」では、平地でなく地形的に複雑な場所に遷都された開京が次第に都城化されてゆくプロセスが明らかにされる。遷都前の鐵圓は明快なグリッドをもった都城であったが、開京は地形条件から整形プランをとることができなかった。したがって都市化・都城化は遷都以後徐々に進行したのであって、当初寺院などの宗教施設が政治・国家儀礼の場として代替され、その後官庁および官僚組織が整備されていくことになる。都城の重要な要素である羅城もまた、遷都当初は建設されておらず、およそ100年後に完成している。典型的な都城である長安や日本の平安京などと比較すると、時間をかけて都城化する開京独特の性格がみられる。

第2部「開京の都城としての特性と重層的空間構造」では、第1部でみた開京の特殊性の背景となる要素について詳細な分析が行われる。すなわち国家権力の都市支配装置としての寺院の役割、市場の設置とその変化に対する政治的・経済的背景が述べられ、これらが重層的に展開することで開京固有の都城性ともいべき都市の質が形成されることになる。ここでは寺院や市場の立地を空間的手法を駆使して復元的に考察しており、この種の試みは本論が最初のものである。

第3部「都市空間の実態と開京の位相」は、第1・2部を補完する考証で、政治の中心施設である高麗正宮の配置に関する復元的考察および都市内商業施

設となる市場のさらに詳細な建築的実態に関する考察からなる。ここでは先行研究を検討しながら、独自の空間復元案が提示されている。

上記の考察を総合して、結論部分ではあらためて開京の都城・都市としての特質が述べられ、時間性と重層性という従来の都城論で見過ごされていた論点が抽出される。

以上のように本論は高麗時代の都城・開京の全体像をはじめて明らかにした力作であって、限られた資料を深く読み込んだうえでの論理展開はきわめて説得力がある。とりわけ空間的立場を基軸にすえた都市の政治的・経済的・文化的特質に対する考察は、既往研究の欠を埋めるばかりでなく、この分野の研究水準を一挙におしあげる成果となって結実した。よって、本論は博士（工学）の学位にふさわしい業績として認められる。